

貨車に乗りさらにトラックに乗せられ到着した所は山の中。今までの閑静な農場とは打って変わった収容所で、仕事は伐採作業だ。奥深い山の中にトラックで運ばれ、無線通信機を持った手が二人引き鋸に変わったのだ。友より聞く話だと、最初はノルマが四立米だったのが六立米、今では八立米とのこと。死に直面した絶望の生き地獄さながらだ。ノルマを達成した組は毎日数えるほどしかなかった。

現場へ着くと、伐採に適した立ち木を探す。一抱えもある大木が物凄いい響きを立てて倒れる光景は壮観ではあるが、最も危険です。死傷者がかなり生じたのです。酷寒の中での作業ゆえ、防寒服防寒靴で動作が鈍い上に、栄養失調と三重のハンディで完全に麻痺し、大木に押しつぶされて他界した友は数知れません。

死亡することに屋外のテントの中に安置して、大体五十人くらいになるとトラックに積み、山の中の大きな穴に埋葬するのです。実は私の祖父が僧侶なので、私は幼いときから門前の小僧でお経は詠めましたので、埋葬するたびに涙を流しながら、戦友よ安らかに

眠れよと一心にお題目を唱えました。

過酷な極限状況の抑留生活は一生忘却はありません。また命の恩人看護婦マローシャさんを偲ぶ意味で、復員以来現在に至るまで、夏にヒマワリを栽培しています。

抑留中及び帰国後亡くなりました多数の戦友のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

私の捕虜体験記

新潟県 田中 新治郎

入ソまで

終戦の報を聞いたのは、北鮮の地名も知らない場所であった。

血気にはやったつわものたちは「そんなことを言うとおぼく殺されるぞ」と連絡員をどなっていた。間もなく武装解除の命が出て、銃身に刺んだご紋章を小石で削って一か所に積んだ。やがて部隊は吉州に集結する

ことになり、南下を始めた。

明川駅前の広場で終日待機した。八月十八日であったと思う。無蓋車に盛りこばれるばかりに乗せた列車が通過する。待てど待てど乗車の番はこない。

夕方、戦車の轟音が迫ってくる。ついに来るものが来たのだ。甲高い声とともに真つ先に降りてきたのが、マンドリン（自動小銃）を堤げた女兵だったのには驚いた。完全にソ連軍の掌握下に入った我々は、もう逃げも隠れもできない。広い川原のようなところで夜を迎えた。夜中に監視をよそおって兵隊が来た。あちこちで時計をとられたという。

それから始まる長い行軍は、一体何の目的であったか知らないが、北上したり南下したり、けっこう引きずり回されて咸興に着いたのが、肌寒い十月末であった。しばらく学校で逗留し、やがて埠頭の作業に回った。糧秣その他の物資の積み込みが終わり、興南を出港したのが、十二月二十日ごろであった。

寒々と雪をかむった北鮮の連山を左舷に見て船は北上する。広い船倉は身動きもできないほどの人で埋ま

り、奴隷船そのままだ。何とも情ない。

ウラジオストック港で元旦を迎え、さらに北上する。びっしりはりつめた氷上に下船したのが、ソフガワニである。

大切に持っていた米をたいてたらふく食べようと口に入れたら、異様な臭いと苦しさで思わず吐き出す。海水でたいたので仕方ない。残念だ。

やがて到着したのが第三収容所。いよいよ捕虜生活が始まる。

チバリの伐採作業

幾日か過ぎて伐採にチバリへ行くことになる。何キロ歩いたか、道中泣き出す者もいた。何ともつらい行軍であった。夜が明けて着いたところが、山小屋のような小さな収容所である。二、三日たつていよいよ伐採作業だ。

見渡す限りのカラマツとエゾマツの原生林が続いている。二人びきの長い鋸で根切り、枝払いをして長材のまま斜面を流す。地響きを立てて数十メートルを一気に滑り落ちていくのが実に見事だ。

収容所の生活は最低だ。朝鮮から持ってきたでん粉でつくっただんごのすいとん汁が夕食だからたまらない。頻繁に小便に通う。

消灯前といっても「電気がない」。朝食のパンが上がる。大切にしまっておいたら、だれかにとられたので、翌晩からは直ちに食べることにした。昼食が小さなキャベツ一個のこともよくあった。栄養が悪い上に労働がきつい。

ある日、負傷者が出た。医者はいないので、衛生下士官が太もも切断という大手術を行った。その後の消息は知らないが、実に地獄そのままの生活であった。

雪解けとともに山を下り、海岸の小さな収容所に移動した。魚関係の作業である。

ある日、所長が何人か呼び出して本隊に移動するよう命じた。私もなれたところを変わるのがおっくうな上、魚とりの希望を募ったので、早速手を挙げた。これがダモイの分かれ目とは、人生何事も紙一重のものである。

小さな漁船で沿海州を南下する。漁場は河口にある

小さな漁村であった。無数のサケがぼんぼんはねて川を上る。河口で地引きをかけたくさんのサケがとれた。内臓を除き水洗いしてコンクリづくりの穴に入れる。塩と水をほうり込んで漬ける。

食生活はよかった。水煮したサケを腹いっぱい食べる。栄養はよく、作業は楽だ。実にチバリと対照的であった。

ダモイ

ソフガワニを後に次の地区に移動したのが二十二年のいつごろであったか、ウォロシロフという大都会であった。

そのころから民主運動が盛んになった。日本新聞を主題に活発なアジプロ活動が続いた。

ダモイ話を持ち上がったのは、二十四年の八月である。ある朝、ソ連将校が全員の前で、諸君は近々日本に帰ると伝えた。幾度かだまされ続けられた私たちは、納得しかねたが、何も彼も忘れて帰国を喜んだのである。

シベリア抑留夜語り

東京都 青木 貞一

(一) 収容所

その日は、いつもと違って、宿営地到着が遅れ夜になっても歩かされた。市街地らしいところを通った記憶もないので、遠回りをした来たのでしょうか。

後から知りましたが、シベリア三大都市の一つであるウオロシロフという町の郊外でした。長蛇の列は丘の上に導かれ、疲労しきっていた私たち作業大隊の五百人は、暗やみの中で収容所とも知らず、吸い込まれるようにその中へ入ってしまいました。

そこは、鉄条網に囲まれたラーゲルだったのです。昭和二十年の九月下旬か十月上旬のころだったでしょう。東部満州から徒歩での入りですから、十数日を要したのではないのでしょうか。

常時ソ連兵の監視、悪質な水、生煮えのコウリヤン、

さらに連日にわたる降雨に悩まされ続けて極度に疲労していました。

「シベリアを経由して日本に帰る」と言われての入所でしたが、さにあらず、そこは地獄の一丁目だったのです。

翌日から早速私たちは、自分の押し込められている収容所から、自分たちが逃げ出せないように鉄条網を三重、四重と頑丈につくり上げる作業に取りかかることになりました。早くも悲しき運命の訪れでした。

とはいうものの、さすがに根性と体力の持ち主がいて、数日後の真夜中、鉄条網を切断して脱走を企て、その場で銃撃を受け即死、という事件が起きました。

広い収容所は、四隅に高く組み立てられたやぐらがあり、二、三人のソ連兵が夜通し鉄条網沿いに光線に向けて監視しているので、とても脱走の成功なんて考えられるものではありませんでした。

銃殺された者は二人らしい、いや、三人だそうだが、と情報は飛び交いましたが、このうわさが忘れられるころになって再び脱走事件が起きました。